

## ジェンダー Gender

平井 晶子 しょうこ

キーワード…性役割、性別役割分業、良妻賢母、近代家族、日本的経営、主婦、母、ケア労働、東アジア

### 一 ジェンダー関係は変わったか

一九八〇年代、社会的性差、すなわちジェンダーという視点が本格的に登場した。この新しい概念は、女らしさ／男らしさに違和感を覚え、その窮屈な殻を破りたいと考えていた人々に大きな期待をもつて迎えられた。研究者のみならず学生たちにも魅力的に見えた。江原由美子らが著した最初期の教科書『ジェンダーの社会学——女たち／男たちの世界』（新曜社、一九八九）は、柴門ふみのイラストが表紙を飾るオレンジ色のソフトカバーであった。当時の気分がよく現れている。

それから三十年。ジェンダー概念は学術的に確固たるポジション

を築いた。また社会においては、一九八五年に男女雇用機会均等法（その後何度も改定）が、一九九九年には男女共同参画社会基本法が制定され、男女格差是正への枠組みは一定程度整えられた。

しかし、現実の男女の社会的ポジションや性役割は期待されたほど変わらなかつた。二〇一七年も世界の男女平等ランキング<sup>②</sup>において日本は一一四位、先進国で飛び抜けて低い。今やこれが日本の「特徴」であるかのようで、日本研究の一要素にもなってしまった。

このような変わりにくい日本のジェンダー関係は家族のありようと不可分に結びついている。言い尽くされた言葉ではあるが「男は仕事、女は家庭」——この構図は今も概ね続いている<sup>③</sup>。未婚であっても必ずしもこの状況から逃れられるわけではない。この分業体制を前提とする労働システム、福祉システムが走っているからである。

本稿では、この頑強に見える日本のジェンダー関係をひもとくため、比較的入手しやすい単著を中心に紹介する。性別役割分業はいつ、どのように広がったのか、当事者たちはどのような意識でこのプロセスを進めてきたのか（受け入れてきたのか）、女性たちはどのような気持ちでケア役割を担ってきたのか、欧米の経緯とは異なる日本的なる過程、またアジアのなかの差異も踏まえた成果から「ジェンダーで見る日本」を考える（おもに日本語文献を扱うがいくつかは英訳もある。読みやすい方で読んでもらえればと思う）。

## 二 主婦の誕生

落合恵美子『21世紀家族へ』

第一章が「女は昔から主婦だったか」で始まる落合恵美子『21世紀家族へ——家族の戦後体制の見かた・超えかた』（初刊一九九四…第三版、有斐閣、二〇〇四）<sup>1</sup>では、高度経済成長期の日本家族の特徴が「主婦化」「二人つ子」「人口ボーナス世代」から説明される。ここで注目する主婦化は女子労働力率という指標をもとに、時代ごとの推移から導き出され、「女が主婦」という性役割が日本で普及したのは高度経済成長長期にすぎないことが示される。

本書は大学での講義をもとに書き下ろされたもので、章ごとに

「問いと答え」がセットになった非常にわかりやすい構成になっている。第一章の「女は昔から主婦だったか」との問いは、「女は主婦」という当たり前を問い直す斬新な問いであり、次章以下も目から鱗<sup>うろこ</sup>が落ちるような「問いと答え」が並ぶ。

落合は欧米の家族史やフェミニズムの成果を踏まえ、産業化・工業化のなかで職住が分離し、労働が有償／無償に分かれ、それぞれに男性／女性が割り当てられてきたこと、欧米先進国では二十世紀前半に主婦化が進んできたことを整理したうえで、「では日本は？」と問う。たとえば、図1-3女子労働力率の長期変動（一九〇〇～一九九五年）では、二十世紀の百年間の女子労働力率を、スウェーデン、アメリカ、ドイツ、フランス、イギリスと日本を対比させる（二三頁）。「産業化・工業化は女性を主婦化させる」と言われても「欧米女性の方が労働力率は高いはず」という認識はなかなか変わらない。しかし、一九七〇年までの七十年間、日本の女子労働力率が欧米先進国と比べて圧倒的に高いことを見せられると納得せざるをえなくなる。

よりリアリティが出るように世代の違いによる主婦化の推移も示される。つまり、日本では高度経済成長に伴い主婦が増えたこと、言いかえると戦後生まれの団塊世代がもつとも主婦化した層ということになる。戦後、家からの解放をめざした団塊世代は「友達夫婦」「ニューファミリー」を形成したが、彼らがもつとも性別役割

分業家族を生きたことになる。

本書は、説得力のある、しかも非常にシンプルなデータで、戦後日本の性役割や家族の特徴を説明する。ときに産業化・工業化のなかで「普遍的」に形成されてきた「近代家族」の展開として、ときに日本の伝統家族との関連から、ときに乳幼児死亡率の改善という人口学的要因から、データを取り出し解が導き出される。本書全体を読み通すことで、主婦化についてだけでなく、戦後日本のジェンダー特性・家族特性が立体的に浮かび上がる一冊となっている。

木本喜美子『家族・ジェンダー・企業社会』

主婦化を進めた団塊世代（一九四七～四九年生まれ）には言わずと知れたもうひとつの顔がある。高度経済成長の推進者である。高度経済成長までは終身雇用も年功序列もなく、当然、日本の経営もなかった。急激な工業化、経済成長の過程で、大量の労働者を必要とする企業と、農村から都市に出てきて小さな幸せを求めた労働者とその家族、両者が手を携え作り上げたのが日本の経営であることを、木本喜美子の『家族・ジェンダー・企業社会——ジェンダー・アプローチの模索』（ミネルヴァ書房、一九九五）は教えてくれる。本書は決して読みやすい本ではないが、企業社会との関係を抜きに日本の性役割を考えることはできない。理論編が苦手な方は第三部「家族と（企業社会）」だけでも読んでほしい。

本書は、一九八〇年代に行われたトヨタ自動車の労働者調査・生活実態調査をベースに、「世界に名だたる長時間労働体制の国日本において、他の先進工業諸国に比して家族の相対的安定性がみられるのは何故なのか」（二頁）と、企業と家族のあり方をジェンダーの視点から問うた労作である。そしてトヨタという大企業の事例からではあるが、日本家族が安定しているのは、「（企業社会）が（近代家族）モデルを企業内福利厚生制度などを通して付与し、バックアップしたからであり、労働者そして家族の側も、物質優先主義という価値観を共有する限りで（企業社会）を下支えしてきた」（五頁）からと結論づける。日本の雇用慣行も性役割も、正体不明のものかに強いられたわけではなく、成長を続けたい企業と、豊かさを求める労働者とその家族が「相互に浸透し合い、一種の均衡状態」（五頁）のなかで作りに上げた「共犯関係」の成せる技であったと読み解く。

これら二冊に代表されるように、「女は主婦」という性役割は、大正期の新中間層で産声を上げ、高度経済成長の過程で広く浸透し、「企業社会」と手を携えて日本家族を特徴づけてきた。では、日本の経営がゆらいでいる現在、「企業社会」と「共犯関係」にあった家族はどうなるのか。現時点で見えているのは「家族をつくらない（＝未婚化）」という選択の広がりである。われわれには「従来の家

族」か「未婚」かしか道はないのか——そんなことはないだろう。落合や木本が示すように、「従来の家族」も初めからあつたわけではない。たかだか数十年前にできたものである。<sup>⑤</sup>

### 三 ジェンダーの日本の特徴・母役割

次に母役割に焦点を移そう。

近代家族はいずれの社会でも「子ども中心主義」の要素を含んでおり、母であることが女性の重要な役割とされる。そのなかでも日本はとくに（夫婦の情緒的關係が相対的に弱く）親子の絆が強い社会と言われてきた。子どもに何かあると親の責任、とくに母の責任、母の子育てが問われる。

#### 小山静子『良妻賢母という規範』

日本的といわれる強い母役割の基底には良妻賢母規範が横たわり、と広く信じられていた。しかし、小山静子はこの常識を覆す。その画期的著作が『良妻賢母という規範』（勁草書房、一九九一）<sup>⑥</sup>である。小山によると、江戸期は「女性を」劣等視する価値観のもとで、夫や舅姑に対して従順な妻や嫁（二三四頁）を求めたのであり、母役割への言及はほとんどなかった。明治以降の近代国家の建設に

あたり、子どもを育て、教育する母役割が強調されるようになり、やがて家事に責任をもつ妻役割も強調されるようになったという。男性は生産活動や兵役に従事することで近代国家の国民として直接的に統合された。それに対して女性は家事・育児を担うことで間接的に近代国家の国民に統合された。つまり「良妻賢母」というイデオロギーは、「男は仕事、女は家庭」という近代的な性別役割分業に即応し、近代社会の形成にとって不可欠のものであった」（二三四頁）と結論づける。良妻賢母が近代国家に要請されたものだったがゆえに、公教育のなかで普及がはかられたのである。

私たちは「良妻賢母」思想が近代的思想であるとは知らず、日本の悪しき伝統（あるいは良き伝統）と信じてきた。それゆえ、良妻賢母的女性像からの解放は古い伝統からの解放であると考えてきた。しかし、実際にはそれは戦後家族が求めた近代家族的なるものであった。戦後の母親たちは「教育ママ」と陰口を叩かれたり、育児不安を抱えたり、迷いながら不安のなかで孤独な育児を行ってきた。何が日本の伝統なのか、何が近代家族的なのか、自分たちは何を求め、何を否定したいのか、実のところよく分からない混沌とした状況のなかで母役割を模索してきたのではないか。ジェンダー構造の成り立ちが明らかになることで、複雑に絡んだ糸がようやくよくほどけてきたように思われる。

瀬地山角『東アジアの家父長制』

落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編『アジアの家族とジェンダー』

良妻賢母に代表されるような親子中心の家族像や母役割中心の女性像は、欧米との対比で顕著になるとともに、どこか（東）アジア的とも見なされてきた。そんななか、いち早く日本を東アジアに位置づけ直し実証的に検討したのが、瀬地山角の『東アジアの家父長制——ジェンダーの比較社会学』（勁草書房、一九九六）である。瀬地山は、韓国、台湾、中国、北朝鮮という四ヶ国との対比で日本のジェンダー関係を読み解き、当時としては独自の境地を切り開いた。瀬地山も女性労働力率を有力な手がかりとしながら、社会主義体制／資本主義体制、漢民族／朝鮮民族という二つの軸から、それぞれの社会の「性に基づく権力や役割の配分」（二頁）を比較した。

そして、儒教の影響を強く受けているのは朝鮮半島だけであり、日本や中国、台湾は儒教の影響があまり強くないこと、東アジアのなかでも日本の母役割の強さが「特殊」であることを明らかにした。つまり、欧米との対比で浮かび上がる日本のジェンダー関係は（東）アジア的と一括りにできるものではなく、特殊日本的であることを知らしめた。

当時、瀬地山は一人で日本と東アジア四ヶ国の比較を行ったが、その後、国際共同研究が進み、より広範囲の比較社会学的実証研究が展開されるようになった。なかでも、東南アジアも含む六ヶ国比

較からジェンダー関係の日本の特徴をあぶり出したのが、落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編の『アジアの家族とジェンダー』（勁草書房、二〇〇七）である。子育てと介護に焦点をあて、だれがどの程度、担っているのかを、中国、タイ、シンガポール、台湾、韓国、日本で比較する。とくに子どものケアについては、母親、父親、親族、家事労働者、施設（保育園・幼稚園）がどのように役割を分担しているのかの比較がなされ、それぞれの国の特徴がよくわかる。

欧米の読者には、現代の日本、フランス、スウェーデンの比較から入る方がわかりやすいかもしれない。松橋恵子の『育児のジェンダー・ポリテイクス』（勁草書房、二〇〇六）では、子育て中の共働き夫婦へのインタビューから、それぞれの夫婦の「葛藤」の事例が示される。共働きで子育てをするという同じ状況が比較されるため、国ごとのジェンダー関係の違い、それへの社会の対応の差がよくわかる。

上野千鶴子編『主婦論争を読む 全記録』

本節の最後に日本の特徴を理解するユニークな資料、上野千鶴子編『主婦論争を読む 全記録』（全三巻、勁草書房、一九八二）を挙げておこう。これは、一九五〇年代から一九七〇年代にかけて三度繰り返し広げられた「主婦論争」の全記録である。

日本では一九五〇年代という比較的早い段階で、母／主婦をめぐる独自の議論が起きていた。たとえば一九五九年には文化人類学者の梅棹忠夫が、やがて主婦は存在意義を失うだろうと主張する「妻無用論」を著し大きな話題になった。主婦論争はさまざまな媒体で繰り広げられ、書き手も評論家、経済学者、文学者、主婦など多様な人々が参加する興味深い論争であった。この資料集を編んだ上野は、一九八二年の解説で「主婦を取り巻く状況が根本的には変化していない」「論点がほとんど出つくしている」「日本の主婦論争は、その時期の早さと、論争の水準の高さで、注目すべき」と主婦論争を評価している。あらためて目を通し、早くからこれだけの論点が出そろいながら、今日に至っても「男は仕事、女は家庭」という構図が変わっていないことに驚く。

#### 四 現代のケア労働とジェンダー意識

戦後の日本社会では、水道、ガス、電気などのライフラインが充実し、新しい電化製品が次々と発売され、家事は格段に楽になると思われた。ところが、現実には「楽」にはならなかった。なぜなのか。その答えとして「なるほど！」と納得させられた三冊を紹介する。

品田知美『家事と家族の日常生活』

ほんとうのところ家事・育児時間は減ったのか、増えたのか。生活時間調査や食事調査の記録をもとに、昭和初期からの家事の変化を質・量から徹底的に追求したのが品田知美の『家事と家族の日常生活——主婦はなぜ暇にならなかったのか』（学文社、二〇〇七）である。品田の記述は極めて具体的で、どのような家事にどれだけ時間を費やしていたのか、昭和のはじめ頃の家にはどのような道具があり、毎日何を食べていたのか、読み物としても非常におもしろい。

一九四〇年以降についてこのような詳細な分析を行った本書は、一九七〇年頃まで「主婦役割」と一括できるようなリアリティはなく、職業階層による違いが大きいことをわかりやすく提示する（主婦論争が多様になり得たのも主婦役割の多様性があったからかもしれない）。また、主婦が一般化した一九七〇年代以降、二〇〇〇年代まで、主婦の家事時間はあまり変わっていないとも言える。便利になってもやはり家事は減らない。<sup>10)</sup>

また本書ではイギリスやオランダとの比較から、現代日本の家事時間が長い理由のひとつに子どものお手伝いを挙げる。日本の子どもはいくつになっても「手がかかる」のに対し、欧米では大きくなるほど「役に立つ」。夫婦関係ではなく母役割を重視する日本の家族では、「手にかかる」子どもの存在は「必要」なのかもしれない。家事時間の分析は家族関係の本質を考える手がかりも与えて

くれる。

山田昌弘『近代家族のゆくえ』

家事・育児に「手をかける」意味を、近代家族の本質的パラドックスとして見せてくれるのが山田昌弘の『近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドックス』（新曜社、一九九四）である。山田は「バラサイト・シングル」や「婚括」という流行語の生みの親であり、現代社会を鮮やかに切り取る名手である。本書も専門書でありながら非常にわかりやすく議論が進む。

なぜ家事は楽にならないのか。山田は、愛情で結びついているはずの近代家族は、愛情がなければならず、家族の情緒的役割を担うとされる妻は、その愛情を表現し続けなければならないと言う。そのため近代家族では、家事に料理や掃除という機能だけではなく、愛情表現という意味が付与される。愛情表現ゆえに家事は「自らを拡大再生産する構造」になっており、「際限なく続けなくてはならない」（二五九頁）。山田は日本的特徴としてではなく、近代家族がもつそもそのパラドックスを示す。

大和礼子『生涯ケアラーの誕生』

三冊目は、大和礼子の『生涯ケアラーの誕生——再構築された世代関係／再構築されないジェンダー関係』（学文社、二〇〇八）であ

る。大和は介護に対する女性たちの意識に注目し、未だ「再構築されないジェンダー関係」、すなわち生涯にわたりケアの担い手であり続けたいと願う女性たちのジェンダー観を描き出す。

日本の場合、家族に関する法律、制度を変えるには長い時間がかかる（夫婦別姓法案が未だに提出もされていないように、時間をかけても一向に進まないことが多い）。しかし、介護の社会化をめざす介護保険制度だけは例外的に短期間で成立した。それはなぜか。これが大和の問いのはじまりである。本来なら「親の介護を子どもがするのは日本の美徳であり、それを保険でまかない他人にゆだねるとはけしからん」とケチが付きそうな法案である。にもかかわらずこれが通つたのは「親の介護がイヤ」だから介護を社会化してほしいのではなく、一九七〇年代以降、主婦として母役割をアイデンティティの中心に据えてきた女性たちの、いつまでも「ケアする」側でありたいとの願い、手塩に掛けて育てた子どもに介護「される」ことを拒否した、その現れだったからと説明する。極めて鋭い考察である。

親の介護をした女性たちの、子を思う気持ちで介護の社会化をもたらし、世代関係は再構築されることになった。しかし、その女性たちは夫からも子どもからもケアを受けず「生涯ケアラー」であることを願う。すなわちジェンダー関係は解体されず、むしろ強化された大和は言う。

これら三冊に共通するのは、一九七〇年代以降に主婦化が本格化して以降、主婦役割に没入していく女性像である。主婦からの解放ではなく、むしろ没入し、必死に子どもへ愛情を注ぐ母の姿である。女性が専業主婦になれる経済状況が崩れてきた今日もなお、このパラドックスから抜けられていないのではないか。

## 五 ジェンダーの歴史

これまで現代のジェンダー研究を見てきたが、日本には魅力的な女性史・ジェンダー史の世界も広がっている。歴史的研究を読みたい方のために、三つのシリーズを挙げておこう。

一つ目は、言わずと知れた女性史の大家、脇田晴子を中心に編集された『ジェンダーの日本史』（共編、上下巻、東京大学出版会、一九九四）である。「宗教と民俗」「身体と性愛」（以上、上巻）「主体と表現」「仕事と生活」（以上、下巻）と、テーマ別に編集されたユニークな論文集である<sup>①</sup>。

残りは、一九八〇年代、女性史研究がもつとも勢いのある時代に女性史総合研究会によって編集された『日本女性史』（全五巻、東京大学出版会、一九八二）と『日本女性生活史』（全五巻、東京大学出版会、一九九〇）である。こちらは時代別に編集されているので、好

きな時代から入れるシリーズになっている。

今回の文献案内では取り上げることができなかったが、ジェンダーには「男性学」「フェミニズム」「セクシュアリティ」「トランス・ジェンダー」など見るべきトピックはまだまだある。別の機会があることを期待する。

注

- (1) 漫画家・エッセイスト。マンガの代表作に『東京ラブストーリー』『あすなろ白書』、エッセイの代表作に『恋愛論』など。
- (2) 世界経済フォーラムの「世界ジェンダー・ギャップ報告書2017」より。
- (3) 現代は「男は仕事、女は家庭+仕事」とも言われる。しかし、女性の有償労働が増えても、おもな稼ぎ手役割を男性が担い、おもな家事・育児責任を女性が担うというジェンダー関係は続いているため、本稿ではジェンダー関係は概ね変わっていないと理解している。
- (4) 英訳がある。Emiko Ochiai, *The Japanese Family System in Transition: A Sociological Analysis of Family Change in Postwar Japan*, Tokyo: LICB International Library Foundation, 1997.
- (5) 現在の未婚化の状況については、平井晶子・床谷文雄・山田昌弘編『出会いと結婚』（日本経済評論社、二〇一七）を参照。
- (6) 現状については筒井淳也『仕事と家族——日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか』（中公新書、二〇一五）を、新しい可能性については牟田和恵編『家族を超える社会学——新たな生の基盤を求めて』（新曜社、二〇一〇）を参照。



- (7) 英訳がある。Koyama Shizuko, Ryōsai Kenbo: *The Educational Ideal of "Good Wife, Wise Mother" in Modern Japan*, translated by Stephen Filler, Leiden: Brill, 2015.
- (8) 英訳がある。Sedhiyama Kaku, *Patriarchy in East Asia: A Comparative Sociology of Gender*, translated by James Smith, Leiden: Brill, 2013.
- (9) 英訳ではないが英語の類書 (Emiko Ochiai and Barbara Molony, eds., *Asian New Mothers: Crafting Gender Roles and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies*, Global Oriental, 2008) がある。
- (10) アメリカと対比して読みたが読者は、Ruth Schwartz Cowan, *More Work for Mother: The Ironies of Household Technology from the Open Hearth to the Microwave*, Basic Books, 1983 (『お母さんは忙しくなるばかり——家事労働とテクノロジーの社会史』高橋雄造訳、法政大学出版社、二〇一〇) を合わせて読むと日本の特徴がよくわかる。
- (11) 英訳がある。Wakita Haruko, Anne Bouchy, and Ueno Chizuko, eds., *Gender and Japanese History*, 2 vols., translation editor Gerry Yokota-Murakami, Osaka University Press, 1999